



技桑初集

二十四

伊地知文庫  
文庫20  
360  
27





文庫20  
360  
27

投素拾葉集卷第二十四

目錄

初之志（一）之（二）之（三）發句（四）事記

友原美隆

詠月和歌序

同

道堅法師自歌合政

同

細川右京大夫自歌合政

同

中原遠忠自歌合政

同

慰系議基綱口共書餘哀和歌序

同



















交は去る。毎の月。字  
いづれも月。雲并の月。字  
道徳の如き。何れも徳を  
らぬ。志し。花を。若くは。月。字  
おの。じ。雲。の。何れ。と。志。わ。母  
秋の月。何れ。と。年。と。い。ぬ。ん  
若く。と。け。か。た。母。の。ま。し。と。し  
そ。ら。か。ら。り。と。の。若。く。と。い。ぬ。ん  
い。づ。れ。も。月。と。送。る。い。づ。れ。も  
と。母。れ。い。づ。れ。も。思。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ

山のとほむ。おや。う。た。人。恋。ま。い  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ  
い。づ。れ。も。月。の。か。ら。い。ぬ

道徳法師自歌合波

同

杯。此。帖。の。道。徳。禪。師。独。吟。の。字。音。は。た。右。母。の。







































りの事... 昔... 見... 上... 道...  
 の... 言... 上... 道...  
 元... 思...

御製

何... 母... 花...  
 又... 志... 心...  
 又... 又...

世... 何... 又... 又... 又...	世... 世... 世... 世... 世...	世... 世... 世... 世... 世...	世... 世... 世... 世... 世...
--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------















一和尙道はあついで五首寄しを納めしはしをとり  
こいしきぬ結りかくしめりしとあつたつてしり  
つこすめし人こころしうらむきよしうらむし  
社はゆしとて神楽の世十首歌書納きしめ  
可くゆしゆし神楽寺のゆしとてしりし神楽の  
橋より松原はあつて後乃わしとて道遠しとて

あつたゆしは恒吉しといて叔父し  
わしは貝しといきやむらし

和泉の場はゆしとてを道にゆしは若河の  
といつとてをいへぬあつたあつた松原といき  
海はこしといへし世のつねの松の葉よし似し

吹ししはゆしは見し結し

本和しは吹去る色とみし

若しはゆしはあつた松し

南宮光の院よりしりてしりしとてしりし  
れはゆしは又波寄るの寺しゆしはゆしはゆしは  
光の院よりしりし招清しはゆしはゆしは  
廿二日之野は余清のしりし思しはゆしはゆしは  
志ししはゆしはゆしはゆしはゆしはゆしは  
ゆしはゆしはゆしはゆしはゆしはゆしは







少々の後には、法に成りぬる。續後拾遺集  
又入札のや思ひの如くして

あきとていひとあつと七十九  
きよも母のあゝ後の世中

實相院とて、あつてこそ。あはれこそ、あつてこそ。あつてこそ。  
あ程。初夜入の境とあつて

あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。

女言毎言何うと人トヤ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
杉川施方寺。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
也。在教。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。

尊ハ十面乃子手親善とていふ。類の文字施善。あつてこそ。  
法統の文字とて。寺とていふ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
乃筆。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
れがやとていふ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。

法乃もあはけ方。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
杉川の氷乃。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。

あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。

あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。  
あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。あつてこそ。



女あふハ芳野しはし純の川乃  
ゆ女の花まきし河の女色は  
はらわしとむいり川原はまきし花まきとどめ  
西の女あふとむいり

うらむきし河の女まきあふ衣  
まきの川原乃あまわしりして  
都の女あふとむいりまきあふ衣  
しはら女あふとむいりまきあふ衣  
いしあふとむいりまきあふ衣  
あふとむいりまきあふ衣  
はならむいりまきあふ衣

とどめ  
よととめ・月桂法師の戯

西けとふ女しとむいり  
結あふとむいり  
あふとむいり  
えしりやむいり  
はらわしとむいり  
うらむきし河の女まきあふ衣

先の女まきあふ衣  
あふとむいり  
あふとむいり  
あふとむいり



うはふて、一と院乃奥指し、予以て、人々を  
ぬる程、郭云の頻るや、

予野山佛、法悦、

由つ、

其日、  
相し、  
れり、  
身、  
と、

今、  
あ、

奥院、  
め、

陪、  
神、

所廟、  
か、  
珍、  
こ、

あ、

え、

内、







宿坊にいらしては侍を待

思ひ入るに人の心と

うらん塵の世と

かくし根束の十端もつこと侍も夜半入

講向にこめと触れ

自らしくも若根松の

高れもそぬる法力の

女六日伊ま去らるるまを油にてうらら

と見結ぬる世に去る人侍も人

と侍も又連類して

と侍もかゝる元らぬ

とて頻よい結

郭公ぞ

かこまれと云われ

宗瑞志

の

の社の

袖の

の

言

廿七日

一盡







濱松の麓をうらやまむ 鄭公  
くさくさ夜半のこゝろの静けさ

宗碩

とくさき波を月が秋まじく

二日塚と云てすまらぬは海とて 法神樂の  
くせぬ思ひはせし

神は海に松とて思ふ位のをや

まじくさるる波の志をせよ

天王ちよめゆるる 伊もくうらり しのほろく  
又きせはし 飛舟のありて

枝まの笑ひをくさくさむいひ

飛舟のありてはくさくさ

舟の念佛堂あり 武庫山が現の洋院二寺あり

九曲等しよまの儀物あり 唐らりわさき 吾奈

大原木舟は乳とけさるる 何れも 眼精滅生身

よそくさくさ 妙堂のありて 舟の法師あり有

多しとや 一とを信地衣よりけしせぬ

くさくさ 何れも 舟にけしけしと玉を

くさくさ 舟にけしけしと玉を

武庫の山よりお 舟にけし

うめを 櫻らり乃る 舟にけしけしと玉を

はとよ 舟にけしけしと玉を







海のきぬきりしは伊家へ送し。まふれと海  
草のしとせねあし。まふぬの若菜色。はし葉  
の荒。まふいそまへ送れ結い。まふぬ也  
久く。まふぬ。ぬるるり。野邊の雪まら儀  
う。まふ。澤邊の氷のまふい。まふぬ。まふぬ  
ぬ。まふぬ。まふぬ。まふぬ。まふぬ  
免。まふぬ。まふぬ。まふぬ。まふぬ  
ら。まふぬ。まふぬ。まふぬ。まふぬ

枝葉拾葉集卷第二十四終



